第２章　吉田遺跡第Ｉ地区Ｅ区の追加調査

１　調査の概要

吉田遺跡第Ｉ地区Ｅ区の大部分は、第２学生食堂を含まず食堂前面の道路部分であった。Ｅ区の調査は、食堂の建設に伴う事前調査であったはずであるが、いかなる経緯によるものか食堂敷地内をずれている。食堂敷地内はＥ区の調査期間である昭和46年10月16日～11月21日の間には、調査が行われていなかったようである。Ｅ区図面中には、昭和46年12月15日の日付と「食堂敷地」の地区名が記入された調査区平面図がある。この調査区平面図の西端には、Ｅ区で検出された溝状遺構の南端部が記入されている。このことより、「食堂敷地」の注記をもつ調査区が、Ｅ区の東側に隣接していたことが推定された。まさしく第２学生食堂敷地内の調査であり、Ｅ区の調査終了後に行われた追加調査であったらしい。

吉田遺跡調査団が発行したガリ版刷りの『山口市山口大学構内吉田遺跡調査概報[1]』に解説された第Ｉ地区Ｅ区の調査概要には、追加調査についての記述がある。「なお追加調査で、東部から隅丸長方形の竪穴住居と土壙各１基を確認した。」との一文である。第Ｉ地区Ｅ区調査後に発行されたと思われる『山口大学構内第Ｉ地区Ｅ区発掘調査概報[2]』には、追加調査に関する記述は見あたらない。

この追加調査に関して、埋蔵文化財資料館に残された記録は、調査区平面図（1／100）１葉、住居跡平面図（1／10）１葉、住居跡断面図（1／10）１葉、住居跡平面図と断面図の縮図（1／40）１葉のわずか４葉の図面だけである。図面の中には日付の入ったものがある。調査区平面図には昭和46年12月15日、住居跡平面図には昭和46年12月16日と記述されている。また、出土遺物に関して、その所在は不明である。

Ｅ区追加調査の出土遺構に関しては、埋蔵文化財資料館に残された４葉の図面、縮図が１葉含まれているから実質３葉の図面から想定していくしかない。

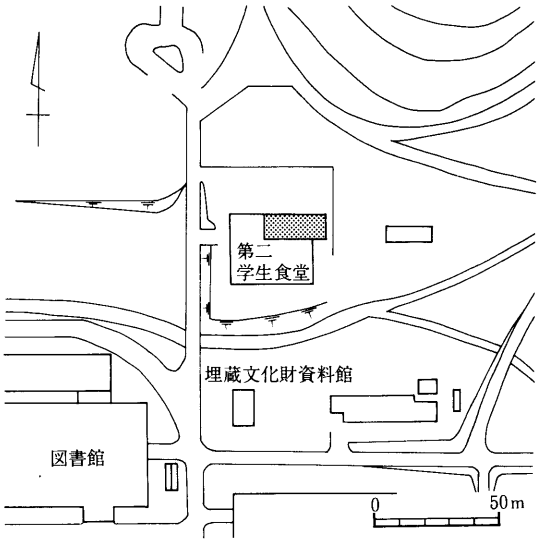

Fig. 89　調査区位置図

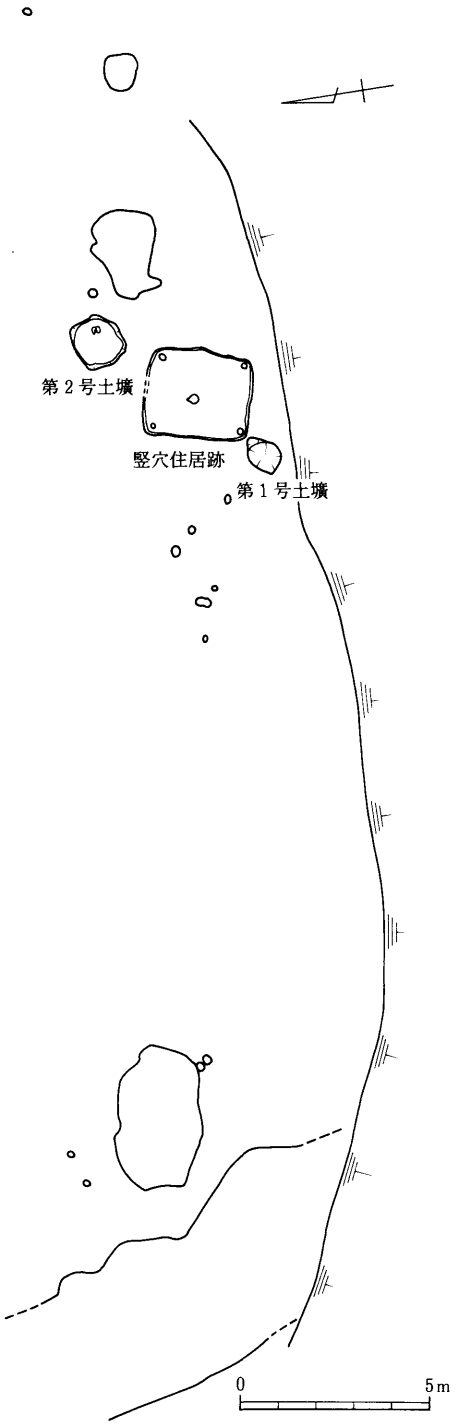

Fig. 90　遺構配置図

2　層位

Ｅ区追加調査に関して、土層断面図は残されていない。しかし、隣接するＥ区の土層堆積は試掘調査時の日誌に記録されている。おそらく同じ丘陵上で調査区が隣接する以上、土層堆積はほぼ同じものと考えられる。

第Ⅰ層：褐色土（表土層）、第Ⅱ層：暗青灰色土（水田耕土層）、第Ⅲ層：淡暗褐色土（包含層）、第Ⅳ層：黄褐色土（地山）

3　遺構

竪穴住居跡（Fig.91）

平面形態は方形で、北辺約2.2ｍ、南辺約2.0ｍ、東辺約2.5ｍ、西辺約2.5ｍ、床面積約5.3㎡の規模をもつ。遺構検出面より、床面は深さ約10㎝を測る。壁溝をもたない。本調査区は遺構の分布密度が低く、他遺構と切り合わないため、良好な状況で本住居跡に伴う柱穴が検出されている。方形の住居跡の４隅に対応するように、４個の柱穴が配列されている。直径15～20㎝であり、床面からの深さは約30㎝を測る。これらは、桁材を支えた主柱穴と考えられる。また、この住居跡は中心にも、柱穴がある。直径約25㎝、深さ約40㎝と他の柱穴に比べて一回り大きい。東壁の中央に接して、焼土が充塡した直径約25㎝、深さ約３㎝の土壙がある。焼土はこの土壙を中心として、周囲に広がっていたようである。この土壙に接した、東壁部分は外側にやや張り出しており、竈であった可能性もある。また、北壁中央で壁の不明瞭な一部分があり、調査者は入口を想定している。

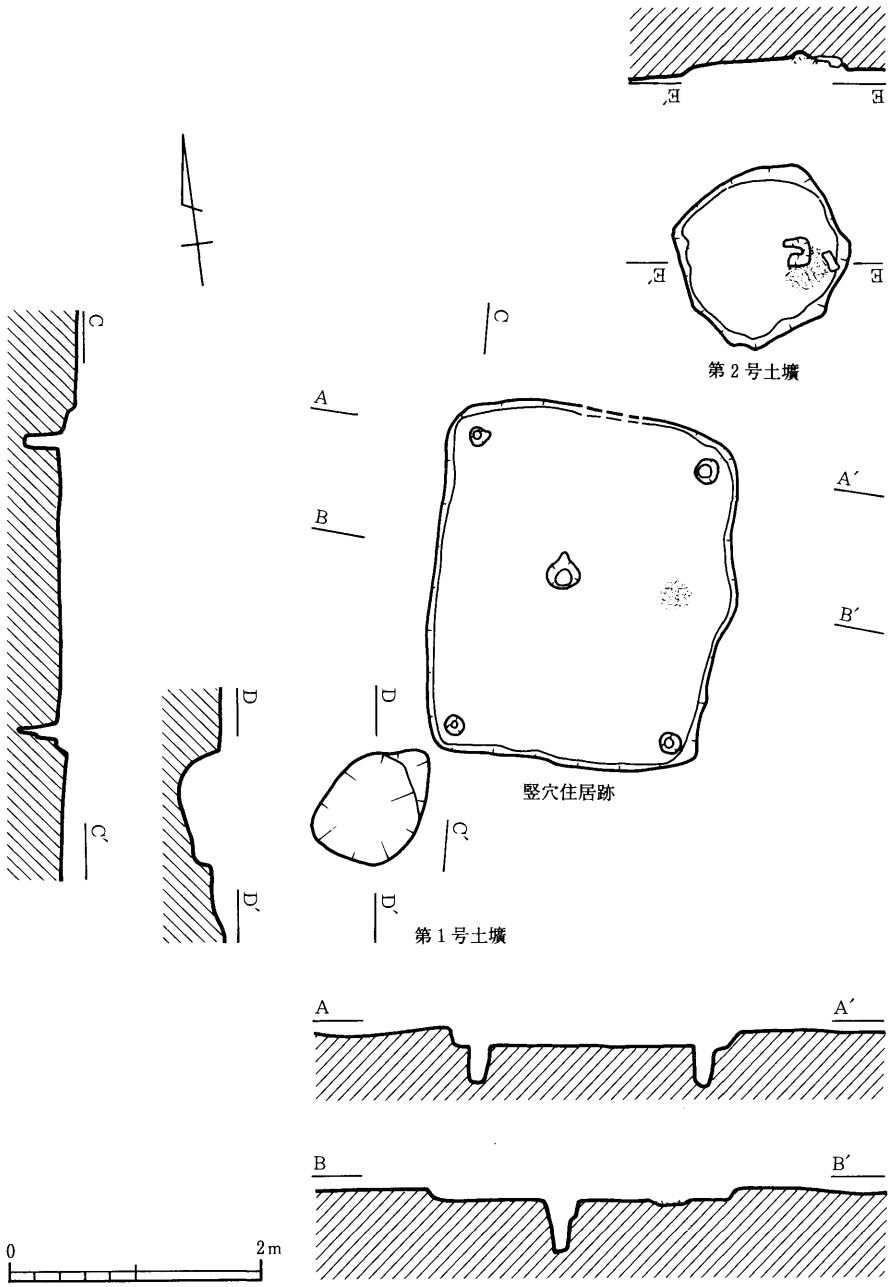

Fig. 91　竪穴住居跡及び第1・2号土壙実測図　　（標高は不明）

土壙（Fig.91）

本調査区からは、5基の土壙が検出されたようである。しかし、詳細な平面図が残されている土壙は、住居跡に接した2基のみである。この2基に関して報告を行うが、これら

も遺構断面図は残されているものの、土層堆積の図面は残されていない。

１号土壙

１号土壙は、住居跡の南西隅に接する。本土壙は、長軸約0.9ｍ、短軸約0.83ｍの平面形態が不整円形である。深さは遺構検出面から、約30cmを測る。平面図及び断面図からは、これ以上のデーターは読み取れない。

２号土壙

２号土壙は、住居跡の北東隅から北に約80cmの距離に位置する。本土壙は、長軸約1.4ｍ、短軸約1.3ｍの平面形態が不整円形を呈する。深さは遺構検出面から、約15cmを測る。この浅い土壙内の東に偏って、焼土層の広がりが認められる。焼土層と土壙東肩の間に、石が置かれている。支脚の役目をはたしたのであろうか。また、この焼土層下には、コの字状の浅い掘り込みがあったようである。

柱穴（Fig.90）

住居跡の西側に、柱穴が散在していたようであるが、詳細は不明である。

４．小結

Ｅ区の追加調査（食堂敷地内）では、１棟の竪穴住居跡と５基の土壙及び柱穴が検出された。遺構の密度はＥ区に比較して希薄であり、遺跡の中心からは外れた箇所と考えられる。

竪穴住居跡は方形のプランを呈するが、床面積は約5.3㎡ときわめて小形である。しかし、４隅には主柱穴を配し、東壁には竈を有しており、住居の構造としては正規なものである。棟方向と竈の位置からすれば、Ｅ区の１号、２号竪穴住居跡と関連するものである可能性がある。しかし、出土土器がないため、時期決定はおこなえないので推定の域に留まる。

この竪穴住居跡に接近した位置にあり、附属施設の可能性も考えられるのが２号土壙である。２号土壙は浅い皿状を呈し、東に偏った焼土層の広がりが認められる。この焼土層の東端には石が設置されており、竈の構造に類似する。図面の注記には、この焼土層中からの須恵器の出土が記されている。現在この須恵器は、所在不明である。この２号土壙と竪穴住居跡は１ｍ以内の近接した位置にあり、２号土壙が火を使用したことを考えるならば両者の同時並存は困難であるかもしれない。ただ、両者とも竈状の構造物が同じ東側にあることを考えるならば、全く関連がないとは断言できない。関連があるとするならば、竪穴住居跡に付随したその性格が問題となる。竪穴住居跡の床面積が小さいことに関わるのであろうか、屋外調理施設の可能性を想定したい。

Fig. 92　第Ⅰ地区Ｅ区の地形及び全体図

5　第Ⅰ地区Ｅ区の総括

吉田遺跡第Ⅰ地区Ｅ区は、大学会館前庭部遺構群の一部として包括される。姫山の北から南にのびる支脈の南先端、緩傾斜面にこれらの遺構群は立地している。Ｅ区及び追加調査地からは方形竪穴住居跡が６棟検出されているが、昭和58年度大学会館新営予定地Ｍ－14・15区の試掘調査[3]でも１棟の方形竪穴住居跡が検出されており、この斜面上が古墳時代中期の安定した居住区であったことは疑いない。ただし、７棟が同時期に建ち並んでいたわけではなく、３・４棟で構成される自然発生的な小部落であったと考えられる。

山口大学構内の吉田遺跡は、現在のところ大きく３つの居住区があったであろうと想定されている[4]。このうち、構内東部の微丘陵（第Ⅳ地区）の実態は明かではなく、実質的には保存地区（第Ⅲ地区）と大学会館前庭部（第Ⅰ地区）の２カ所に大きく区分される。注目すべきは、保存地区集落と大学会館前庭部集落の時間的関係である。保存地区集落が円形竪穴住居跡を主体として一部の方形竪穴住居からなるのに対して、大学会館前庭部集落は全てが方形竪穴住居跡で構成されている。さらに、保存地区集落における方形竪穴住居跡はベッド状遺構を有し竈をもたないが、大学会館前庭部集落の方形竪穴住居跡はベッド状遺構をもたず竈を有するという違いがある。この竪穴住居跡の構造から判明することは、保存地区集落が弥生時代中期から古墳時代前期まで継続的に営まれているのに対して、大学会館前庭部集落の確実な居住は古墳時代中期からということである。（ただし、大学会館前庭部からは、わずかではあるが弥生時代の遺構や住居跡が検出されており一概には古墳時代中期以前の居住を否定できない。）保存地区集落は古墳時代前期以降には廃絶されたものと考えられ、古墳時代中期に明確となる大学会館前庭部集落への移住も想定しうる。

９世紀～10世紀の須恵器・土師器を含む堅牢な溝状遺構は、古代における吉田遺跡の性格を考えていく上で重要である。大学会館から出土した特殊な遺物は、官衙的な性格を帯びるものであった。しかし、遺構には保存状態の良いものがなく、不明な点が多かった。Ｅ区において、橋脚状の遺構をもった区画的な溝が検出されていたことが明かとなり、より具体的に官衙など役所的な遺跡としての可能性を議論しうるようになった。

［注］

１）吉田遺跡調査団『山口市山口大学構内吉田遺跡調査概報』

２）吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区Ｅ区発掘調査概報』

３）山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新営予定地Ｍ－14・15区の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年）

４）河村吉行「考察」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年）